

清心庵

泉鏡花

青空文庫

米と塩とは尼君が市に出で行きたまうとて、庵に残したまいたれば、摩耶も予も餓うることなかるべし。もとより山中の孤家なり。甘きものも酔きものも摩耶は欲しからずという、予もまた同じきなり。

柄長く椎の葉ばかりなる、小き鎌を腰にしつ。籠をば糸つけて肩に懸け、拾短に草履穿きたり。かくてわれ庵を出でしは、午の時過ぐる比なりき。

麓に遠き市人は東雲よりするもあり。まだ夜明けざるに來るあり。芝茸、松茸、しめじ、松露など、小笹の蔭、芝の中、雑木の奥、谷間に、いと多き山なれど、狩る人の数もまた多し。

昨日一昨日雨降りて、山の地湿りたれば、茸の獲物さこそとて、朝霧の晴れもあえぬに、人影山に入乱れつ。いまはハヤ朽葉の下をもあさりたらむ。五七人、三五人、出盛りたるが断続して、群れては坂を帰りゆくに、いかにわれ山の庵に馴れて、あたりの地味にくわしとて、何ほどのものか獲らるべき。

米と塩とは貯えたり。笕の水はいと清ければ、たとい木の実一個獲ずもあれ、摩耶も予も餓うることなかるべく、甘きものも酢きものも渠はたえて欲しからずという。

されば予が茸狩らむとして来りしも、毒なき味の甘きを獲て、煮て食わむとするにはあらず。姿のおもしろき、色のうつくしきを取りて歸りて、見せて樂ませむと思ひしのみ。

「爺や、この茸は毒なんか。」

「え、お前様、そいつあ、うっかりしようもんなら殺られますぜ。紅茸といつてね、見ると綺麗でさ。それ、表は紅を流したようで、裏はハア真白で、茸の中じやあ一番うつくしいんだけど、食べられましねえ。あぶれた手合が欲しそうに見ちやあ指をくわえるやつでね、そいつばかりや塩を浴びせたつて埒明きませぬじや、おッぽり出してしまわつせえよ。はい、」

といいかけて、行かむとしたる、山番の爺はわれらが庵を五六町隔てたる山寺の下に、小屋かけてただ一人住みたるなり。

風吹けば倒れ、雨露に朽ちて、卒堵婆は絶えてあらざれど、傾きたるまま苔蒸すままに、共有地の墓いまなお残りて、松の蔭の処々に数多く、春夏冬は人もこそ訪わね、盂蘭盆にはさすがに詣で来る縁者もあるを、いやが上に荒れ果てさして、霊地の跡を空しゅうせじ

とて、心ある市まちの者より、田畑少し附属して養いおく、山番の爺は顔丸く、色煤すすびて、眼まなこは窪くぼみ、鼻はな田く、眉は白くなりて針金のごときが五六本短く生おいたり。継はぎの股もも引膝ひざまでして、毛脛けずね細く瘡やせたれども、健かに。谷を攀よじ、峰にのぼり、森の中をくぐりなどして、杖つえをもつかで、見めぐるにぞ、盗人ぬすびとの来て林に潜むことなく、わが庵も安らかに、摩耶たのもも頼母しく思うにこそ、われも懐ししと思いたり。

「食べやしないんだよ。爺や、ただ玩弄おもちゃにするんだから。」

「それならば可ようござが。」

爺は手桶ておけを提ひげいたり。

「何でもこうその水きの中へうつして見るとの、はつきりと影の映るやつは食べられますで、茸きのこの影がぼんやりするのは毒がありますじや。覚えておかつしやい。」

まめだちていう。頷うなずきながら、

「一杯吞ましておくれな。咽喉のどが渴いて、しょうがないんだから。」

「さあさあ、いまお寺から汲くんで来たお初穂だ、あがんなさい。」

掬むすばむとして猶た予らいぬ。

「柄杓ひしゃくがないな、爺や、お前まへン処ところまで一所に行ゆこう。」

「何が、仏様へお茶を煮てあげるんだけんど、お前様のきれいなお手だ、ようござ、つつこんで吞まつしやいさ。」

俯向うつむきざま掌たなに掬くいてのみぬ。清涼きりやう掬くすべし、この水の味はわれ心得たり。遊山ゆうさんの折々かの山寺の井戸の水試みたるに、わが家のそれと異ことならずよく似たり。実げによき水ぞ、市まちな中かにはまた類たぐいあらじと亡き母のたまいき。いまこれをはじめならず、われもまたしばしばくらべ見つ。摩耶と二人いま住まえる尼君の庵なる笕の水もその味あじわいこれと異なるなし。悪熱のあらむ時三ツの水のいずれをか掬むすばんに、わが心地いかならむ。忘るるばかりのみはてたり。

「うんや遠慮さつしやるな、水だ。はい、強いるにも当らぬかの。おお、それからいまのさき、私わしが田圃たんぼから歸りがけに、うつくしい女衆が、二人づれ、丁稚でつちが一人、若い衆が三人で、駕籠かごを昇かいてそろそろとやって来おった。や、それが空駕籠じやったわ。もしもし、清心様とおつしやる尼様のお寺はどちらへ、と問いくさる。はあ、それならと手を取るように教えてやつが、お前様用でもないかの。いい加減に遊ばつしやつたら、迷児まいごにならずに歸けえらつしやいよ、奥様が待つてござろうに。」

と語りもあえず歩み去りぬ。摩耶が身に事なきか。

二

まい茸^{だけ}はその形細き珊瑚^{さんご}の枝に似たり。軸白くして薄紅^{うすべに}の色さしたると、樺色^{かばいろ}なると、また黄なると、三ツ五ツはあらむ、芝茸^{しじ}はわれ取つて捨てぬ。最も数多く獲たるは紅茸^{こうじ}なり。

こは山蔭の土の色鼠に、朽葉黒かりし小暗^{おくら}きなかに、まわり一抱^{かかえ}もありたらむ榎^{えのき}の株を取巻きて濡色^{くれない}の紅^{くれない}したたるばかり塵^{ちり}も留めず地に敷^{つち}きて生^おいたるなりき。一ツずつそのなかばを取りしに思いがけず真黒なる蛇の小さきが紫の蜘蛛^{くも}追^おい駈^かけて、縦横^{たてよこ}に走りたれば、見るからに毒々しく、あまれるは残して留^やみぬ。

松の根^{つくば}に踞^{つくだ}いて、籠^{かご}のなかさしのぞく。この茸^{きのこ}の数も、誰^たがためにか獲^とたる、あわれ摩耶^{まよ}は市に帰るべし。

山番の爺^{おや}がいたるごとく駕籠^{かご}は来て、われよりさきに庵^{いほ}の枝折戸^{しおりど}にひたと立てられたり。壮佼^{わかも}居^ゐて一人は棒^{おとが}に頤^がつき、他は下に居^ゐて煙草^{たばこ}のみつ。内にはうらわかきと、冴^さえたと、しめやかなる女の声して、摩耶^{まよ}のものというは聞えざりしが、いかでわれ入らるべ

き。人に顔見するがもの憂ければこそ、摩耶も予もこの庵には籠りたれ。面合すに憚りたれば、ソと物の蔭になりつ。ことさらに隔りたれば窃み聴かむよしもあらざれど、渠等空駕籠は持て来たり、大方は家よりして迎に來りしものならむを、手を空しゆうして帰るべしや。

一同が庵を去らむ時、摩耶もまた去らでやある、もの食わでもわれは餓えまじきを、かかるもの何かせむ。

打こぼし投げ払いし籠の底に残りたる、ただ一ツありし初茸の、手の触れしあとの錆つきて斑らに緑晶の色染みしさえあじきなく、手に取りて見つつわれ俯向きぬ。

顔の色も沈みけむ、日もハヤたそがれたり。濃かりし蒼空も淡くなりぬ。山の端に白き雲起りて、練衣のごとき艶かなる月の影さし初めしが、刷いたるよう広がりにて、墨の色せる巔と連りたり。山はいまだ暮ならず。夕日の余波あるあたり、薄紫の雲も見ゆ。そ

よとばかり風立つままに、むら薄の穂打靡きて、肩のあたりに秋ぞ染むなる。さきには汗出でて咽喉渴くに、爺にもとめて山の井の水飲みたりし、その冷かさおもい出でつ。さる時の我といまの我と、月を隔つる思いあり。青き衾に黒き帯して瘡せたるわが姿つくづくとしながら寂しき山に腰掛けたる、何人もかかる状は、やがて皆孤児になるべき

兆^{きざし}なり。

小笹ざわざわと音したれば、ふと頭^{かしら}を擡^{もた}げて見ぬ。

やや光の増^{きた}し来れる半輪の月を背に、黒き姿して薪^{たきぎ}をば小脇にかかえ、崖^{がけ}よりぬくと出でて、薄^{すすきはら}原^{あらわ}に顕^{あらわ}れしは、まためぐりあいたるよ、かの山番の爺なりき。

「まだ帰らつしやらねえの。おお、薄ら寒くなりおった。」

と呟^{つぶや}くがごとくにいいて、かかる時、かかる出会の度々なれば、わざとには近寄らで離れたるままに横^{よこ}がりて爺は去りたり。

「千ちゃん。」

「え。」

予は驚^{みかえ}きて顧^{みかえ}りぬ。振返れば女居たり。

「こんな処に一人で居るの。」

といいかけてまず微笑^{ほほえ}みぬ。年^{とし}紀^{みそじ}は三十に近かるべし、色白く妍^{かおよ}き女の、目の働^{いきい}き活^{いきい}々^きとして風采^{とりなり}の佚^{きやん}なるが、扱^{しごき}帯^{きりり}きりりと裳^{もすそ}を深く、凜^{りり}々^きしげなる扮^{いでたち}装^{しつ}しつ。中^なぎしキラとさし込みつつ、円^{まるまげ}髻^{つやや}の艶^{もと}かなる、旧^{もと}わが居たる町に住みて、亡^{ゆき}き母上とも往^{ゆき}来^きしき。年^{とし}紀^{わか}少^{やもめ}くて嬬^{やもめ}になりしが、摩耶の家^{まのや}に奉公するよし、予もかねて見知りたり。

目を見合せてさしむかいつ。予は何事もなく領うなずきぬ。

女はじつと予を瞻みまもりしが、急にまた打笑えり。

「どうもこれじゃあ密通まおとこをしようという顔じゃあないね。」

「何をいうんだ。」

「何をもないもんですよ。千ちゃん！ お前様まえさんは。」

いいかけて渠かれはやや真顔になりぬ。

「一体お前様まあ、どうしたというんですね、驚いたじゃありませんか。」

「何をいうんだ。」

「あれ、また何をじやアありませんよ。盗人ぬすびとを捕えて見ればわが児こなりか、内の御新造ごしんぞ様のいい人は、お目に懸かるとお前様だもの。驚くじやアありませんか。え、千ちゃん、まあ何でも可いいから、お前様ひとつ何とかいって、内の御新造様を返して下さい。裏店うらだなの媽々かかが飛出したって、お附合五六軒は、おや、とばかりで騒ぐわねえ。千ちゃん、何だってお前様、殿様のお城か、内のお邸やしきかという家の若御新造が、この間の御遊山から、直ぐにどこへいらつしやったかお帰りが無い、お行方が知れないというのじやアありませんか。ぱッとしたら国中の騒動になりますわ。お出入でいりが八方に飛出すばかりでも、二千や三千

の提灯ちようちんは駈かけまわろうというもんです。まあ察しても御覧なさい。

これが下々したじたのものならばさ、片膚脱かたはだぬぎの出刃庖丁の向う顧巻はちまきか何かで、阿魔あま！とばかりで飛出す訳じやアあるんだけれど、何しろねえ、御身分が御身分だから、実は大きな声を出すことも出来ないで、旦那様だんなさまは、蒼あおくなつていらつしやるんだわ。

今朝のこつたね、不断いつぱち一八に茶の湯のお合手にいらつしやった、山のお前様、尼様の、清心様がね、あの方はね、平時いつもはお前様、八十にもなつていてさ、山から下駄穿げたばきでしやんと下りていらつしやるのに、不思議と草鞋穿わらしばきで、饅頭笠まんじゅうがさか何かで遣やつて見え
てさ、まあ、こうだわ。

(御宅の御新造様は、私わしん処ところに居ますで案じさつしやるな、したがな、また旧もとなりにお前の処へは来ないからそう思わつしやいよ。)

と好きなことをいって、草鞋も脱がないで、さつさつ去いつておしまいなすつたじやないか。さあ騒ぐまいか。あつちこち聞きあわせると、あの尼様はこの四五日しごんち前から方々の帰依きえ者しやん家をずつと廻とこつて、一々、

(私わしはちつと思ひ立つことがあつて行脚あんぎやに出ます。しばらく逢わぬでお暇いとま乞こいじや。そして言つておくが、皆の衆決して私わしが留守へ行つて、戸をあけることはなりませぬぞ。)

と、そういつておあるきなすツたそうさね、そして肝心のお邸を、一番あとまわしだらうじやあないかえ、これも酷いわね。」

三

「うつちやつちやあおかれない、いえ、おかれないどころじやあない。直ぐお迎いをというので、お前様、旦那に伺うとまあどうだろう。」

御遊山を遊ばした時のお伴のなかに、内々清心庵にいらつしやることを突留めて、知つたものがあつて、先にもう旦那様に申しあげて、あら立てはお家の瑕疵かきんというので、そつとこれまでにお使が何遍も立ったというじやアありませんか。

御新造様は何といつても平氣でお歸り遊ばさないうんだもの。ええ！ 飛んでもない。何とおつしやつたつて引張つてお連れ申しませうとき、私とお仲さんというのが二人で、男衆を連れてお駕籠を持つてさ、えツちらおツちらお山へ来たというもんです。

尋ねあてて、尼様の家へ行つて、お頼み申します、とやると、お前様。

（誰方、どなた）

とおつしやつて、あの薄暗いなかにき、胸の処から少し上をお出し遊ばして、真^{まつ}白^{しろ}な細いお手の指が五本^{ついたて}衝立の縁へかかったのが、はつきり見えたわ、御新造様だあね。

お髪^{ぐし}がちいつと乱れてき、藤色の袷^{あわせ}で、ありやしかも千ちゃん、この間お出かけになる時に私が後^{うしろ}からお懸け申したお召^{めし}だろうじやアありませんか。凄^{すご}かったわ。おやといって皆^{みんな}後^{あと}じさりをしましたよ。

驚きましたね、そりや旧^{もと}のことをいえば、何だけれど、第一お前様、うちの御新造様とおつしやる方がき、頼みます、誰方^{たれ}ということを、この五六年じやあ、もう忘れておしまい遊ばしただろうと思つたもの。

誰^{たれ}だじやあございません。さて、あなたは、と開き直つていうことになるよ、

(また、迎^{むかい}かい。)

といつて、笑つていらつしやるというもんです。いえまたも何も、滅相な。

(皆^{みんな}御苦労ね。だけれど私あまだ帰らないから、かまわないでおくれ。ちつとやすんだらお帰りだといひ。お湯^ぶでもあげるんだけれど、それよりか庭のね、笥^{かげひ}の水が大層々々おしいよ。)

なんて澄^{すま}していらつしやるんだもの。何だか私たちああんまりな御様子^{あき}に呆^{あき}れツちまつ

て、ぼんやりしたの、こりやあまあ魅つままれてでもないかしらと思つた位だわ。

いきなり後うしろからお背なせを推して、お手を引張ひっぱつてというわけにもゆかないのでね、まあ、

御ご挨拶あいさつ半分に、お邸はアノ通り、御身分は申すまでもございませぬ。お実家さとには親御様

お両方ふたかたともお達者なり、姑しゅうとこ御と申すはなし、小姑一人にんございますか。旦那様は御存

じでもございましょう。そうかといって御気分がお悪いでもなく、何が御不足で、尼になんぞなろうと思し召すのでございませと、お仲さんと二人両方から申しますとね。御新造様が、

(いいえ、私は尼になんぞなりはしないから。)

(へえ、それではまたどう遊ばしてこんな処に、)

(ちつと用があつて、)

とおつしやるから、どういう御用でツて、まあ聞きました。

(そんなこといわれるのがうるさいからここに居るんだもの。可いいから、お帰り。)

とこんな御様子なの。だって、それじゃあ困るわね。帰るも帰らないもありやあしないわ。

じゃあまあそれはたつてお聞き申しませんまでも、一体此家ここにはお一人でございますか

つて聞くと、

(二人。)とこうおつしやった。

さあ、黙つちやあいられやしない。

こうこういうわけですから、尼様と御一所ではなからうし、誰方とお二人でというとな、
(可愛い児ことき、)とお笑いなすった。

うむ、こりや仔細しさいのないこつた。華族様の御台様みだいさまを世話でお暮し遊ばすという御身分で、考えてみりやお名もまや様で、夫人というのが奥様のことだといってみれば、何のことはない、大倭文庫やまとの、御台様さね。つまり苦勞のない摩耶夫人まやぶにんさま様だから、大方洒落しやれに、ちよいと雪山せつせんのという処をやつて、御覧遊ばすのであらう。凝つたお道楽だ。

とまあ思つちやあ見たものの、千ちゃん、常々の御氣象が、そんなんじやあおあんなさらない……でしよう。

可愛い児とおつしやるから、何ぞ尼寺でお氣に入つた、かなりやでもお見付け遊ばしたのかしらなんと思つてさ、うかがつて驚いたのは、千ちゃんお前まえ様のことじやあないかね。

(いつでもうわさをしていたからお前たちも知つておいでだろう。蘭らんや、お前が御存じの

。

とおつしやつたのが、何と十八になる男だもの、お仲さんが吃驚（びっくり）しようじやあないか。千ちゃん、私も久しく逢わないで、きのうきようのお前様は知らないから——千ちゃん、

——むむ、お妙（たえ）さんの児の千ちゃん、なるほど可愛い児だと実をいえば、はじめは私もそれならばと思つたがね、考えて見ると、お前様、いつまで、九ツや十で居るものか。もう十八だとそう思つて驚いたよ。

何の事はない、密通（まわとこ）だね。

いくら思案をしたつて御新造様は人の女房さ。そりやいくら邸の御新造様だつて、何だつてやつぱり女房だもの。女房がさ、千ちゃん、たとい千ちゃんだつて何だつて、男と二人で隠れていりや、何のことはない、怒つちやあいけませんよ、やつぱり何さ。

途方もない、乱暴な小僧（こぞ）ツ児の癖に、失礼な、末恐しい、見下げ果てた、何の生意気なことをいつたつて私が家（とこ）に今でもある、アノ籐（とう）で編んだ茶台はどうだい、嬰児（ねんねえ）が這（は）つてあるいて玩弄（おもちゃ）にして、チュツチュツ嚙（か）んで吸つた齒形（か）がついて残つてら。叱り倒してと、まあ、怒つちやあ嫌よ。」

四

「それが何も、御新造様さえ素直に帰るといつて下さりや、何でもないことだけれど、どうしても帰らないとおっしゃるんだもの。

お帰り遊ばさないたつて、それで済むわけのものじゃあございませぬ。一体どう遊ばすおぼしめし
思召でございます。

（あの児と一所に暮そうと思つて、）

とばかりじゃあ、困ります。どんなになさいました処で、千ちゃんと御一所においで遊ばすわけにはまいりませぬ。

（だから、此家に居るんじやあないか。）

その此家は山の中の尼寺じやありませんか。こんな処にあの児と二人おいで遊ばしては、世間で何と申しましょう。

（何といわれたつて可いんだから、）

それでは、あなた、旦那様に済みますまい。第一親御様なり、また、

（いいえ、それだからもう一生人づきあいをしないうつもりで居る。私が分つてゐるから、可い

いから、お前たちは帰っておしまい、可いから、分っているのだから、)

とそんな分らないことがありますか。ね、千ちゃん、いくら私たちが家来だからって、ものの理は理さ、あんまりな御無理だから種々いろいろ言うと、しまいにやあただ、

(だって不可いけないから、不可いから、)

とばかりおっしゃって果はてしがないの。もうこうなりやどうしたってかまやしない。どんなことをしてなりと、お詫わびはあとですることと、無理やりにも力ずくで、こっちは五人、何の！ あんな御新造様、腕うでずくならこの蘭一人で沢山だわ。さあというと、屹きつと遊ばして、

(何をおしだ、お前達、私を何だと思うのだい、)

とおっしゃるから、はあ、そりやお邸の御新造様だと、そう申し上げると、

(女中たちが、そんな乱暴なことをして済みますか。良人やどなら知らぬこと、両親ふたおやにだつて、指一本ささしはしない。)

あれで威勢がおあんなさるから、どうして、屹きつと、おからだがすわると、すくんじまわあね。でもさ、そんな分らないことをおっしゃれば、もう御新造様でも何でもなし。

(他人ならばうっちゃっておいておくれ。)

とこうでしょう。何てつたつて、とてもいうことをお肯^きき遊ばさないお気なんだから仕ようがない。がそれで世の中が済むのじゃあないんだもの。

じゃあ、旦那様がお迎^{むかい}にお出で遊ばしたら、

(それでも帰らないよ。)

無理にも連れようと遊ばしたら、

(そうすりや御身分にかかわるばかりだもの。)

もうどう遊ばしたというのだろう。それじゃあ、旦那様と千ちゃんと、どちらが大事でございますつて、この上のいいようがないから聞いたの。そうするとお前^{まえ}様、

(ええ、旦那様は私が居なくつても可^いいけれど、千ちゃんは一所に居てあげないと死んでおしまいだから可^{かわい}哀^{そう}相だもの。)

とこれじゃあもう何にもいうことはありませんわ。ここなの、ここなんだがね、千ちゃん、一体こりや、ま、お前さんどうしたというのだね。」

女はいいかけてまた予が顔^{みまも}を瞻^みりぬ。予はほと一呼^{いき}吸ついたり。

「摩耶さんが知っておいでだよ、私は何にも分らないんだ。」

「え、分らない。お前さん、まあ、だって御自分のことが御自分に。」

予は何とかいふべき。

「お前、それが分る位なら、何もこんなにやなりやしない。」

「ああれ、またここでもこうだもの。」

五

女はまたあらためて、

「一体詮じ詰めた処が千ちゃん、御新造様と一所に居てどうしようというのだね。」
「さることはわれも知らず。」

「別にどうつてことはないんだ。」

「まあ。」

「別に、」

「まあさ、御飯をたいて。」

「詰^{つま}らないことを。」

「まあさ、御飯をたいて、食べて、それから、」

「話をしてるよ。」

「話をして、それから。」

「知らない。」

「まあ、それから。」

「寝つちまうさ。」

「串 戯 じょうだん じゃあないよ。そしてお前様 まえさん、いつまでそうしているつもりなの。」

「死ぬまで。」

「え、死ぬまで。もう大抵じゃあないのね。まあ、そんならそうとして、話は早い方が可
いが、千ちゃん、お聞き。私だつて何も彼家 あそこ へは御譜代というわけじゃあなしさ、早い話
が、お前さんの母 おつかさん 様 とも私あ知合だつたし、そりや内の旦那より、お前さんの方が私
やまつたくの所、可愛いよ。可いかね。」

ところでいくらお前さんが可愛い顔をしてるたつて、情婦 いろこしら を拵 こしら えたつて、何もこの年 とし 紀
をしてものの道理がさ、私がやつかむにも当らずか、打明けた所、お前さん、御新造様と
出来たのかね。え、千ちゃん、出来たのならそのつもりさ。お楽 たのし み！ てなことで引退 ひきさが
ろうじゃあないか。不思議で堪 たま らないから聞くんだが、どうだねえ、出来たわけかね。」

「何がさ。」

「何がじゃあないよ、お前さん出来たのなら出来たで可いじゃあないか、いっておしまいよ。」

「だって、出来たって分らないもの。」

「むむ、どうもこれじゃあ拵えようという柄^{がら}じゃあないのね。いえね、何も忠義だてをするんじゃないが、御新造様があんまりだからツイ私だつてむつとしたわね。行^{ゆき}がかりだもの、お前さん、この様子じゃあ皆^{みんな}こりやアノ児^このせいだ。小児^{こども}の癖^ねにいきすぎな、いつのまにませたろう、取っつかまえてあやまらせてやろう。私ならぐうの音^ねも出させやしないと、まあ、そう思ったもんだから、ちつとも言分は立たないし、跋^{ばつ}も悪^{わる}しで、あつちやアお仲さんにまかしておいて、お前さんを探して来たんだがね。

逢^まつて見ると、どうして、やつぱり千ちゃんだ、だってこの様子で密^ま通^{おとこ}も何もあつたもんじゃあないやね。何だかちつとも分らないが、さて、内の御新造様と、お前様とはどうしたというのだね。」

知らず、これをもまた何とかいわむ。

「摩耶さんは、何とおいだつたえ。」

「御新造さんは、なかよしの朋達^{ともだち}だつて。」

かくてこそ。

「まったくそうなんだ。」

渠^{かれ}は肯^{がえん}する色あざりき。

「だつてさ、何だつてまた、たかがなかの可いお朋達ぐらいで、お前様、五年ぶりで逢つたつて、六年ぶりで逢つたつて、顔を見ると気が遠くなつて、氣絶するなんて、人がありますか。千ちゃん、何だつてそういうじやアありませんか。御新造様のお話しでは、このあいだ尼寺でお前さんとお逢いなすつた時、お前さんは氣^{ひき}絶^{つけ}ツちまったというじやアありませんか。それでさ、御新造様は、あの児がそんなに思つてくれるんだもの、どうして置いて行^ゆかれるものか、なんて好^すなことをおつしやつたがね、どうしたというのだね。」

げにさることもありしよし、あとにてわれ摩耶に聞きて知りぬ。

「だつて、何も自分じやあ気がつかなくつたんだから、どういうわけだか知りやしないよ。」

「知らないたつて、どうもおかしいじやアありませんか。」

「摩耶さんに聞かさ。」

「御新造様に聞きや、やっぱり千ちゃんにお聞き、とそうおつしやるんだもの。何が何だか私たちにやあちつとも訳がわかりやしない。」

しかり、さることのくわしくは、世に尼君ならで知りたまわじ。

「お前、私達だつて、口じやあ分るようにいえないよ。皆尼様みんなあまさんが御存じだから、聞きたきやあの方に聞くが可いんだ。」

「そらそら、その尼様だね、その尼様が全体分らないんだよ。」

名僧の、智識の、僧正の、何のツても、今時の御出家に、女でこそあれ、山の清心さんくらいの方はありやしない。

もう八十にもなつておいでなのに、法華經二十八巻を立たて読よみに遊ばして、お茶一ツあがらない御修行だと、他宗の人でも、何でも、あの尼様といやア拝むのさ。

それにどうだろう。お互の情こころを通じあつて、恋の橋はし渡わたをもしじやあないか。何の事

はない、こりや万事人の悪い髪結かみゆいの役だあね。おまけにお前様、あの薄暗い尼寺を若い

もの同士にあげ渡して、御機嫌よう、か何かで、ふいとどこかへ遁にげた日になつて見りや、破戒無慙はかいむざんというのだね。乱暴じやあないか。千ちゃん、尼さんだつて七十八十まで行い澄すましていながら、お前さんのために、ありやまあどうしたというのだろう。何か、千ちゃん

処は尼さんのお主筋しゆうでもあるのかい。そうでなきや分らないわ。どんな因縁だね。」

と心籠こめて問う状なり。尼君のためなれば、われ少しく語るべし。

「お前も知つておいでだね、母おつかさん上は身を投げてお亡くなんなすつたのを。」

「ああ。」

「ありやね、尼様が殺したんだ。」

「何ですと。」

女は驚きて目を睜みはりぬ。

六

「いいえ、手を懸けたというんじやあない。私はまだ九歳ここのつ時分のことだから、どんなだか、くわしい訳は知らないけれど、母おつかさん様は、お前、何か心配なことがあつて、それで世の中が嫌におなりで、くよくよしていらつしやつたんだが、名高い尼様あまさんだから、話をしたら、慰めて下さるだろうって、私の手を引いて、しかも、冬の事だね。

ちらちら雪の降るなかを山へのぼって、尼寺をおたずねなすつて、炬ろうの中へ何だか書い

たり、消したりなぞして、しんみり話をしておいでだったが、やがてね、二時間ばかり経たつてお帰りだった。ちょうど晩方で、ぴゅうぴゅう風が吹いてたんだ。

尼様が上あがり框かまちまで送つて来て、分れて出ると、戸を閉めたの。少し行ゆき懸かると、内で、

（おお、寒さむ、寒さむ。）と不作法な大きな声で、アノ尼様がいったのが聞えると、母様が立たちど停まつて、なぜだか顔の色をおかえなすったのを、私は小児心こどもこころにも覚えていた。それから、しおしおとして山をお下りなすった時は、もうとつぷり暮れて、雪が……みぞれ霰みぞれになつたろう。

麓ふもとの川の橋へかかると、鼠色の水が一杯で、ひだをうって大蛇おおうねりに蛇うねつちやあ、どうどうツて聞えてき。真ま黒くろな線すじのようになって、横ぶりにびしやびしやと頬ほ辺つべたを打うつちやあ霰あが消えるんだ。一山やま々々になつて柳の枯れたのが、渦を巻いて、それで森しんとして、あかり一ツ見えなかつたんだ。母様が、

（尼になつても、やつぱり寒いんだもの。）

と独ひとりごと言いのようにおつしやつたが、それつきりどこかへいらつしやつたの。私は目が眩くらんじまつて、ちつとも知らなかつた。

ええ！ それで、もうそれつきりお顔が見られずじまい。年も月もうろ覚え。その癖、

嫁入をおしの時はちゃんと知ってるけれど、はじめて逢い出した時は覚えちゃあいないが、何でも摩耶さんとはその年から知合ったんだと思う。

私はね、母様がお亡くななすったって、それを承知は出来ないんだ。

そりやものも分ったし、お亡^{なく}ななすったことは知ってるが、どうしてもあきらめられない。

何の詰^{つま}らない、学校へ行ったって、人とつきあったって、母様が活^いきてお帰りじやあなし、何にするものか。

トそう思うほど、お顔が見たくツて、堪^{たま}らないから、どうしまししょうどうしまししょう、どうかしておくれな。どうでもして下さいなツて、摩耶さんが嫁入をして、逢えなくなつてからは、なおの事、行っちゃあ尼^{あまさん}様を強^ね請^だったんだ。私あ、だだを捏^こねたんだ。

見ても、何でも分ったような、すべて承知をしているような、何でも出来るような、神^じ通^{んずう}でもあるような、尼様だもの。どうにかしてくれないことはなからうと思つて、そのかわり、自分の思つてゐることは皆打^{みな}あけて、いって、そうしちやあ目を瞑^{ねむ}つて尼様に暴^じれたんだね。

「そういうわけさ。」

他に理窟ほかもなんにもない。この間も、尼さまとこン処へ行つて、例のをやつてゐる時に、すつと入つておいでなのが、摩耶さんだつた。

私は何とも知らなかつたけれど、気が着いたら、尼様が、頭を撫なでて、

（千坊や、これで可いいのじや。米も塩も納屋にあるから、出してたべさしてもらわつしやいよ。私わしはちよつと町まで托鉢たくはつに出懸けます。大人しくして留守をするのじやぞ。）

とそうおつしやつたきり、お前、草鞋わらじを穿はいてお出懸でかけで、戻つておいでのようすもないもの。

摩耶さんは一所に居ておくれだし、私はまた摩耶さんと一所に居りや、母様のこと、どうにか堪忍が出来るのだから、もう何もかもうつちやつちまつたんさ。

お前、私にだつて、理窟は分りやしない。摩耶さんも一所に居りや、何にも食ともべたくも何ともない、とそうおいだもの。気が合つたんだから、なかがいいお朋達ともだちだろうよ。」
かくいいし間まにいろいろのことこそ思いたれ。胸痛くなりたれば俯うつむ向きぬ。女かたわらが傍に在るも予はうるさくなりたり。

「だから、もう他ほかに何ともいいようは無いのだから、あれがあだから済まないの、義理だの、済まないじやあないかなんて、もう聞いちやあいけない。人とき、ものをいつてゐる

のがうるさいから、それだから、こうしてるんだから、どうでも可いから、もう帰っておくれな。摩耶さんが帰るとおいしいなら連れてお帰り。大方、お前たちがいうことはお肯ききじゃあるまいよ。」

予はわが襟を搔かき合せぬ。さきより踞つくばいたる頭次第かしらに垂れて、芝生に片手つかんずまで、打沈うちしずみたりし女の、この時ようよう顔をばあげ、いま更にまた瞳を定めて、他のこと思っている、わが顔みまも、瞻みまもるよと覚えしが、しめやかなるものいいしたり。

「可ようござんす。千ちゃん、私たちの心とは何かまるで変つてるようで、お言葉は腑ふに落ちないけれど、さつきもあんなにやア言つたものの、いまここへ、尼様がおいで遊ばせば、やつぱりつむりが下るんです。尼様は尊く思いますから、何でも分つた仔細しさいがあつて、あの方の遊ばす事だ。まあ、あとでどうなろうと、世間の人がどうであろうと、こんな処はとも私たちの出る幕じゃあない。尼様のお計らいだ、どうにか形かたのつくことでござんしように、そうまあねえ、千ちゃん、そう思つて帰ります。

何だか私もぼんやりしたようで、気が変になつたようで、分らないけれど、どうもこうした御様子じゃあ、千ちゃん、お前様まえさんと、御新造様ごしんぞうさんと一ツお床でおよつたからつて、別に仔細はないように、ま私は思います。見りやお前様もお浮きでなし、あつちの事が気に

かかりますから、それじゃあお分れといたしましたよう。あのね、用があつたら、そつと私
ンとこまでおつしやいよ。」

とばかりに渠は立ちあがりぬ。予が見送ると目を見合せ、

「小憎らしいねえ。」

と小戻りして、顔を斜にすかしけるが、

「どれ、あのくらしいな御新造様を迷わしたは、どんな顔だ、よく見よう。」

といいかけて莞爾としつ。つと行く、むかいに蹻音して、一行四人の人影見ゆ。すか
せば空駕籠釣らせたり。渠等は空しく帰るにこそ。摩耶われを見棄てざりしと、いそいそ
と立ったりし、肩に手をかけ、下に居らせて、女は前に立塞がりぬ。やがて近づく渠等
の眼より、うたてきわれをば庇いしなりけり。

熊笹のびて、薄の穂、影さすばかり生いたれば、ここに人ありと知らざる状にて、道を
折れ、坂にかかり、松の葉のこぼるあたり、目の下近く通りゆく。女はその後を追いた
りしを、忍びやかにぞ見たりける。駕籠のなかにものこそありけれ。設の蒲団敷重ねしに、
摩耶はあらで、その藤色の小袖のみ薫床しく乗せられたり。記念にとて送りけむ。家土産
にしたるなるべし。その小袖の上に菊の枝置き添えつ。黒き人影あとさきに、駕籠ゆらゆ

らと釣持ちたる、可惜あたらその露をこぼさずや、大輪おおりんの菊の雪なすに、月の光照り添いて、山路に白くちらちらと、見る目遥はるかに下り行きぬ。

見送り果てず引返して、駈かけ戻りて枝折戸しおりど入りたる、庵のなかは暗かりき。

「唯今ただいま！」

と勢いきおいよく框かまちに踏懸け呼びたるに、答こたはなく、衣きぬの氣勢けはいして、白き手をつき、肩のあたり、衣紋えもんのあたり、乳ちのあたり、衝立ついたての蔭かげに、つと立ちて、烏羽玉うばたまの髪かみのひまに、微笑ほほえみむかえし摩耶めだが顔かほ。簀かきの音おとして、叢くさむらに、虫鳴く一ツ聞えしが、われは思わず身の毛よだちぬ。

この虫の声、簀かきの音、框かまちに片足かけたる、その時、衝立の蔭かげに人見えたる、われはかつてかかる時、かかることに出会いぬ。母上いであか、摩耶めだなりしか、われ覚えておらず。夢なりしか、知らず、前さきの世のとなりけむ。

明治三十（一八九七）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月25日第1刷発行

初出：「新著月刊」

1897（明治30）年7月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

清心庵

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>